

【ご参拝の皆様へ】

仏説観無量寿経（観経）についてミニ解説

* 本願寺派の読経本では、経典の抜粋部分と宗祖・親鸞聖人著の和讃および念仏を差し挟みながら読誦します。

●大乗経典としての特色

『仏説無量寿経』『仏説阿弥陀経』とともに浄土教系聖典の一つ。五世紀の漢訳のみ現存。ある王族での悲劇を題材に、人間の浅ましい真実の姿とその人間がいかに仏の救いに出会えるかを描く。

インドの王舎城・マガダ国ビンビサーラ（頻婆娑羅）国王の王妃・イダイケ（韋提希）が、自分の子アジャセ（阿闍世王）の悪逆に苦しめられ救いを求めたとき、釈尊が十方の浄土を示し、阿弥陀仏とその浄土に往生する十六種の観想法を、人間の資質を九種にわけて説いてゆく。

●序盤は「王舎城の悲劇」

「涅槃経」などにも詳しく描かれ、王子のアジャセ

セが、釈尊の親戚で悪友・提婆達多（ダイバダッタ）にそそのかされ、父であるビンビサーラ王を牢獄に閉じこめ、飢え死にさせようとする。

実は王子が生まれる前、長く子がなかった王と王妃は「ある仙人が死んで王子として生まれかわるでしょう」と占いで言われたが、待ちきれぬ王は使者を遣わし仙人を殺してしまふ。仙人は復讐を誓いながら死に、そしてアジャセが生まれる時、復讐を恐れた王と王妃らは、赤子を高い所から落として殺そうとしたが、死なず成長を遂げた。

王の身を案じるイダイケ妃は、工夫して牢獄内に食物を持ち込み、ひそかに王に食を与えていた。アジャセは怒り狂い、イダイケをも殺そうとするが、家臣二人に「昔から王に謀反する王子はあつても、母殺しの罪を犯した王子はありません」と説得され、母親をも幽閉してしまふ。

囚われの身となったイダイケは激しく憔悴して、耆闍崛山で説法中の釈尊に向かって教えを請う。

その求めに応じて瞬く間に釈尊が現れると、イダイケは地面に身を投げ、号泣しながら訴える。

「私は過去になんの罪があつてこのような悪い子を生んだのでしょうか。また世尊はどのような因縁があつて、提婆達多という悪人と親族なのでしょうか」と訴え、「世尊よ、私のために憂い悩むことなき処をお説き下さい。もはや私はこの濁悪の世にいることを望みません」と懇願する。

そこで釈尊が眉間から光を放つて諸仏の浄らかな国土を現出されると、イダイケはその中から阿彌陀仏の極楽浄土に生まれたいと欲し、続けてそこに行く方法（思惟と正受）を求める。

釈尊は初めて口を開く。「阿彌陀仏の世界は遠くない。おまえや未来の衆生が極楽に生まれるには、諸々の仏と同じように、道徳・戒律・修行の三種の善行につきすすむことだ。しかしおまえは凡夫だから、《仏の力》によって極楽を思い描くがよい」
対してイダイケは「私はいま《仏さまの力》で、

極楽の姿を目の当たりに見る事ができましたが、未来の衆生はお釈迦さまの説法を聞くことができません。ですから《仏さまの力》によらずに極楽を見る方法を教えてください」と請う。

●イダイケ妃はどのように救われるのですか？

ここでイダイケは、絶望し自暴自棄状態を経て、どこか逃げ出したい世界を求めるようになり、釈尊が見せた諸々の宗教的世界のうち、汚れなき悟りの世界よりも阿彌陀仏の極楽浄土を欲する。

しかしそれは自分の悩み苦しみから逃れるに一番ふさわしそうだったからとも言え、しかもそこに行く方法を教えてもらえれば自分も行けるはずという読みもある。いわば極楽世界を自分の好み・欲望の延長線程度としての認識でしかない。

一方、釈尊から《仏の力》や未来の衆生への言葉を聞いて、自分の苦しみを少し相対化するようになる。関心が自己の救いだけから、他者と極楽

世界を共有したい気持ちが現れてきている。

●極楽浄土を想い描いて往生する方法とは？

釈尊はイダイケの求めに応じて、まず精神を統一し、心を西方に専念して阿弥陀仏とその極楽浄土に集中する方法「定善（じょうぜん）の観法」を説く。太陽が西の空に沈みゆく映像を頭の中に焼きつける「日想観」に始まり、極楽世界のありさまや阿弥陀仏の姿・徳、自分が極楽浄土に往生している様を観想するなど十二種の観想である。

次に、極楽に往生しようとする者をその資質や能力から九種に分類し、心が日常の状態で行う「散善の行」三種を自ら説く。その最後で、もっとも重い五逆や十悪の罪を犯し多くの悪業の縁しか持たぬ者が、心から南無阿弥陀仏と称えることで極楽世界に生まれたのち、悟りを開くと示される。

するとイダイケは極楽の光景と、阿弥陀仏と観世音・大勢至菩薩の姿をはっきりと見て、歓喜の

心が起こって全ての迷いはれ、さとりを得ようとする心・菩提心を起こした。

●なぜ初めから称名念仏を勧めなかったのか

その理由としては、王とともに子供欲しさに仙人を殺害し、赤ん坊をも亡き者にしようとした自らの悪業も省みず、教授してもらえば努力精進できると驕っているイダイケに、困難な善人の観法を通して自らの愚かさ・自己中心性を自覚させ、他力念仏の教えに導き入れるためと解釈される。

つまり、仮に「極楽を願うならば、阿弥陀仏の本願を信じ、ただ念仏しなさい」と教えられても、「ハイわかりました。なんまんだぶ」と素直には反応できないのが我々一般的な感性ではないか。

真実の教えに出会っても疑い、都合の良いように捻じ曲げてしまうような頑固さ傲慢さを持っていく我々に、どのように向き合ったら仏法の精神が届くのか考えたとき、釈尊はこのような説き方

を選び、弟子の阿難に「片時も忘れずに阿弥陀仏を思い続けよ」と念仏を強調して説法を終える。

●人は本当の救いを求めているのか

王妃が象徴するのは虚偽と真実の区別に迷う衆生である。特に仏滅後に生きる凡夫には、真実を明示して「己自身を知れ」といっても伝わらない。

どれだけ釈尊の教えを聞き、瞑想を行じ善業を積み上げようと努力するほど、嘘偽りのない生き方《至誠心》も、深く純粹に信じる心《深心》も、全ての行いを浄土に振り向ける意欲《回向発願心》も確立できない自分に直面してしまう。

自らを罪悪深重と省みれば、極楽を見て阿弥陀仏に出会えるのは、《仏の力》が我が身に働くゆえだと明らかになる。人間の誠実や真剣さという次元を超えた念仏行は、釈尊の一切衆生に向けた大悲心の現れであり、逆害・執着などに苦悩する衆生の上にこそ、《仏の力》本願の救いが実現する。

●ところでアジャセに救いはあるのでしょうか？

父が餓死したことを知ったアジャセは、罪の意識にさいなまれ、体中から悪臭を放つ重い病となつて、地獄に墮ちることを恐れる。大臣達は、王子に罪はない縁起の道理はないなどと助言するが救われず、ただ一人ギバ（耆婆）大臣が、アジャセの慚愧する心を認め、釈尊に会うことを勧める。

病態が悪化するアジャセに釈尊は「私はアジャセのために涅槃に入らない」と告げ、月愛三昧（瞑想）に入つて大いなる光明を放つた。その清浄な光でアジャセの全身のできものはたちまち癒えた。

釈尊は「苦しむあなたが救われるまでは私も一緒だよ」と罪業深重の凡夫を無条件に受容し、「その苦しみは私にも責任がある」と縁起の見方を示す。仏の願心がアジャセの心にも満ちた時、過去を深く懺愧しつつも囚われず、喜びと傷みの両方を生き、人々の安穩を願う回心が生まれた。